

要旨

目的

本研究の目的は、有害事象に対処しながら経口分子標的治療を継続している進行性腎がん患者の支えとなる体験を記述することである。

対象および方法

本研究は、有害事象に対処をしながら経口分子標的治療を継続している進行性腎がん患者の語りから、患者の支えとなる体験を明らかにする現象学的アプローチを用いた質的記述的研究である。

進行性腎がんに対して、外来通院により分子標的治療を受け、有害事象を有している4名を対象とした。半構成的面接により、一人の研究協力者に対し1回30～90分、3回面接を行い、データ収集を行った。Heideggerを理論前提として用い、Colaizzi(1978)の分析方法に基づきデータ分析を行った。

結果

経口分子標的治療を継続している進行性腎がん患者の支えとなる体験として、【分子標的治療に効果があると期待する】、【治療を続けることにつながる価値観がある】、【治療によって出現する有害事象が緩和する】、【治療生活において重要他者が存在する】、【治療を続けるために他者の協力や理解がある】、【仕事や社会的役割がある】、【これからも「普段通りの」生活が続く感覚がある】という共通性が明らかになった。

結論

外来通院で経口分子標的治療を継続している進行性腎がん患者は、治療に希望と不安を感じながら、腫瘍と共存しつつ、自分の価値観を大切にし、分子標的治療に伴う有害事象に対処しながら、他者と繋がりを保ち、家族と支え合って治療を継続しているという体験をしていた。分子標的治療を受けるために起こる有害事象により身体に苦痛が生じ日常生活に制限を受けながらも、他者との関わりを通じて自己の在り方の可能性をめがけて生活を継続していた。